

# 企業と連携した情報システム企画の 実践的教育取り組み、改善とその評価

2018/3/31

大阪産業大学 山田 耕嗣, 山田 悟,  
デザインエッグ(株) 佐田 幸宏,  
(株)ウィズテクノロジー 杉本 展将



# 本資料について

- 本資料は、一般社団法人 情報処理学会 情報処理教育委員会 情報システム教育委員会主催による第10回情報システム教育コンテスト(ISECON2017)の本審査用資料を元に再編集されたものです。
- 本資料(山田 耕嗣, 山田 悟, 佐田 幸宏, 杉本 展将,「企業と連携した情報システム企画の実践的教育取り組み、改善とその評価」, ISECON2017, 2018.3.10)は、[クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際 ライセンス](#)の下に提供されています。

# 1. 基本情報

- **教育の対象者**
  - 大学生（1年次～3年次）、文理不問
- **教育目標**
  1. 社会における情報システムの可能性と価値を理解し認識させること
  2. 社会で活躍できるだけの主体性と自立性を身につけさせること
- **本実践の特徴**
  - PBL、アクティブラーニングを意識し企業の実課題を題材としている点
- **本実践の概要**
  - 企業と連携、大学の授業内で企業の課題解決を目的とした情報システムの企画を行い、提案書（ポスター）を作成し提出する
  - 企業に企画の選抜を依頼し、その企画を立案した学生が企業に出向き、プレゼンテーションを実施する
- **本実践の効果**
  1. 情報システム企画スキルとしての、論理性、具体性、独創性、調査力、深掘り力の醸成に一定の寄与をしたこと
  2. 他のアクティブラーニング型実践教育との比較を図り、一般に広く実践可能な教育パッケージとして形成したこと

表1 関連するJ07-LU

LU#	LU名
0124	情報分析（ISまたはITの要求）
0134	プロトタイピングによるIS開発
0445	プロジェクトファシリテーション
0701	情報システムとは
0705	情報システムの企画
1305	要求分析
1310	理解可能な文書作成
1311	理解可能なプレゼンテーション実行

## 2. 本実践の背景／2012年度当時

- **新学部設置時に、授業科目（フィールドプラクティス）を新設**

- 大阪産業大学 情報システム学科（以下、本学科という）では、講座を具体化する上で、学生に対し育成すべき能力をハードスキルとソフトスキルと定めた。ハードスキルは資格や免許、学位など客観的指標が確立しているスキル、ソフトスキルはコミュニケーション能力、デザイン力など客観的指標が未確立なスキルとした。本学科はこれまでハードスキルを改善してきたが、ソフトスキルの向上がおろそかであると考え、本実践（フィールドプラクティス）を通じ、ハードスキルを含めソフトスキルの強化に取り組むこととした

- **講座の目的**

- 社会活動に触れる体験型の学習に重きを置いた実践的な教育とし、観察・体験・調査を通じ、情報技術が、実社会で重要かつ不可欠であることを理解すること

- **期待効果**

1. 情報技術を取り巻く種々の環境・状況を含めた問題点を俯瞰する力
2. 問題点から具体的な技術的課題を抽出する力
3. 技術的課題を解決する知識

# 3.1 実践内容／2012年度

- **授業名称**

- フィールドプラクティス1（前期）、フィールドプラクティス2（後期）

- **受講対象・実施期間**

- 本学科 大学1年生全員（約120名）必修
- 前期：2012年4月～7月、後期：2012年9月～2013年1月  
各期とも15週、うち3週全体講義。12週テーマ学習。各週4コマ（6時間）

- **実施方法**

- 学生を6グループに編成、6テーマを設定。2週／1テーマで計12週実施
- 全グループが全てのテーマを受講。半期全15週のうち、3週は全体講義を実施
- 本実践はこの1テーマにあたる（以降「テーマ学習」と表記する）

- **具体内容**

- 前期、電機メーカーP社。後期、電機メーカーO社と連携
- 1週目 各社のショールームを訪問し、電機製品の技術（P社）、IT応用技術（O社）を学ぶ
- 2週目 所感レポート作製（P社）。見学した技術の概要ならびに応用アイデアについて（O社）レポート作製（いずれも個人単位）を行う。

## 3.2 効果と改善／2012年度

### ● 授業アンケート結果

- － 前期 3.81、後期 3.86

「まじめに意欲的に取り組んだ」の評価。  
5段階評価（5点～1点）の平均値  
（以下、「授業アンケート」について同じ）

### ● 成果

- － 初めての取り組みの中で、学生には一定の評価を得た

### ● 課題

- － 個人ベースの取り組みであったため、個人の能力、意欲によって、レポートの品質に差があった
- － 展示物から得られる情報は、現実課題と乖離しているものも多く、教育目標（社会における情報システムの可能性と価値を理解し認識させること）を十分に達成できなかった

### ● 対応策（図1）

- － 電機メーカーの新規開発部門へアクセス。**実際の企業課題に対する企画を行うことで教育目標を達成すること**を目論む
- － 個人単位から**チーム学習**体制に変更
- － 企画は**企業の選抜**を行うが、あくまでも**企画書面のみで内容を伝える**。選抜された企画は**企業でプレゼンテーション**の機会を得る

3. 実施改訂（案）		
2013年度もパナソニックセンター他、の見学をお願いしたく思います。その中で、上記課題を踏まえ、以下の取り組みを考えております。		
項目	Before (FY.12)	After (FY.13)
テーマの狙い	ショールームを見学し、商品開発取組み、歴史を学ぶこと	見学を「提案」のための情報収集と位置付け、チームの総力をあげ成果物を完成させること
成果物	見学レポート（所感のみ）	<b>Panasonic Smart App新規アイデア提案書</b>
作成単位	個人別のレポート	チーム（5～6名）単位で提案作成
見学先	パナソニックセンター、パナソニックリビングショールームおよびパナソニックミュージアム	パナソニックセンターおよびパナソニックリビングショールーム
見学形態	いずれも説明員をアテンド。パナソニックミュージアムでは自由見学の時間を設定	説明員アテンドおよび自由見学
改訂理由	－	結果として、個別レポートに比べ、チーム単位で議論、検討した成果物の方が優れていること
御社メリット	パナソニックファンの拡大	左記に加え、Panasonic Smart Appの新規サービスのきっかけとなる情報収集
本学としての思い	－	学生のモチベーション向上。企業の方に提案を聞いていただけることは、なにものにも代えがたい

図1 企業への実践提案資料  
（2012年12月14日 P社向け検討資料より抜粋）

# 3.3 具体内容・改訂点／2013年度

## 授業内容を大幅に改訂（受講対象、実施期間は変更なし）

→ 以降、細部修正も本実践のベースとなる

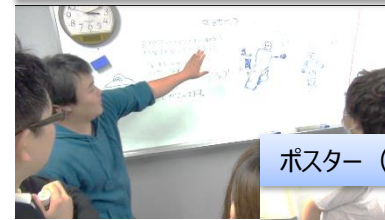
### 前期

- P社と連携。課題は「スマートフォンを駆使した白物家電用アプリの新規アイデア」。P社の目論見は将来顧客である学生の意見、アイデア聴取
- 1週目 P社ショールームを訪問、電機製品とIT技術の関連について学ぶ。チームは4～5名／1チーム
- 2週目 アプリの新規アイデアを企画、ポスターを作製し発表する

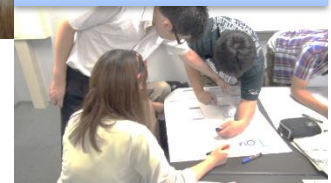
### 後期

- P社、Y社と連携。P社課題は前期と同じ。Y社課題は「ITを駆使したY社製品／サービスの新規アイデア」。どちらの企業の企画を立案するか、は学生が選択
- P社企画は前期の全企画から1件選択、内容をブラッシュアップし、アプリの画面イメージまで詳細化。Y社企画は、企業情報を収集し、新規製品／サービスを企画
- いずれも、全グループ受講後、**作製した企画ポスターを両社に送付し、各企業に選抜**いただく。選抜された企画を立案した**学生は各企業に出向き、企画のプレゼンテーション**（以下、プレゼンという）を行う

ブレインストーミング／企画立案



ポスター（企画書）作製



企業による  
企画選抜を経て



2014年1月14日 P社発表



2014年1月21日 Y社発表

図2 本実践（授業）の流れ



# 3.4 効果と改善／2013年度

## 授業アンケート結果

- 前期 4.07 (前年同期比+0.26)、後期 3.99 (同+0.13)

## 成果

- 学生：普段できない体験ができたこと
- 企業：普段聞けない意見交換ができたこと

## 課題

- 2週、12時間で行える**企画品質の限界**
- 実際に取り組んでいる学生が一部であるチームも見受けられた

## 対応策 (図3)

- テーマ学習を、2週12時間から**3週18時間に拡大**
- **テーマ数は1減** (6 → 5)、全体講義を廃止
- 本実践のテーマは前期2、後期1
- チーム人数を原則**3名**
- 企画品質を高めるため、P社企画では**プロトタイプ**を**作製**


### 3. 実施詳細案 (来年度FP1・前期)

タイトル 電機メーカー アプリケーション企画体験  
 内容 スマートアプリの新規UIアイデアを考え、プロトタイプングアプリで作成する

2014年4月8日～7月22日 FP1 / 各班3週・計18時間

A班(4/8-22)
B班(4/29-5/20)
C班(5/27-6/10)
D班(6/17-7/1)
E班(7/8-22)

新1年生(再履修含む) 110名を5つの班に編成。各班3～4名/1チーム、毎回6チームを編成する

進め方	成果物
<p><b>第1週</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>①主旨・内容説明、チーム編成、プレーストリーミングレクチャー</li> <li>②既存UI (スマートアプリ) チュートリアル参照</li> <li>③前回までの成果物参照</li> <li>④各チームにて、UIアイデア検討。イメージのラフスケッチ作成</li> </ul> <p><b>第2週</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>①UIアイデアの詳細化</li> <li>②プロトタイプングアプリの実装</li> <li>③アイデアの内容、概要まとめ</li> </ul> <p><b>第3週</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>①プロトタイプングアプリの実装、テスト、修正</li> <li>②各班アイデア公開・・・相互に各班のアプリを使ってみる</li> <li>③各班毎にアイデア発表 (プロジェクター使用、発表・質疑)</li> <li>④学生の投票にて、秀作を選出 (投票用紙にて)</li> <li>⑤選出したアイデアの良かった点を議論し、まとめる</li> </ul>	<p>プロトタイプング</p> <div style="text-align: center; margin: 10px 0;">  </div> <p>説明シート(A3 1枚)              ・タイトル              ・概要              ・なぜこれが欲しい?              ・どう工夫したか?</p>

アイデア検討及び秀作選出段階で、「なぜこのアイデアが良かったのかを明確にする」

**専用教卓** (チーム毎にミーティング机、ホワイトボード設置)  
**環境** 10インチAndroidタブレット (チュートリアル参照、プロトタイプアプリでの作成に利用、各班1台)  
 プロトタイプアプリは、POP prototyping または Transition Design※  
※本学タブレットがPOPに対応していないため (他のアプリも検討中)

図3 企業への改善提案資料  
(2014年3月3日 P社向け検討資料より抜粋)



# 3.5 2014～2015年度改善 (サマリー)

- 実践内容の骨子 (リマインド)**
  - 情報システム企画をテーマに、P社、Y社との連携ならびに、企業による企画テーマ提起、企画立案、企画書面のみによる選抜を経て、選抜学生による企業に向けてのプレゼン実践
- 主な改訂点**
  - 前期P社、Y社、別テーマとし各3週充当 (2014年度のみ)
  - 2、3年生のオープン参加実施 (2014年度前期Y社のみ)
  - 全体講義を復活。前期、後期全15週の**第1週目に、企業を招きテーマのレクチャー**。直接学生に意図伝達、第15週目に企業を訪問し、選抜学生のプレゼン実施 (2015年度)
  - 第15週の企業訪問は選抜者のみ。あとは「居残り組」 (2014年度より)
- 主な特徴**
  - 授業アンケートをクラウドシステム (Google Form) で実施 (2015年度より)
  - また、第15週企業訪問時、授業開講時間の密度向上のため、帰路バス内で、スマートフォンでレポート作成
  - 授業進行のWBS (Work Breakdown Structure) を整備、課題難易度向上への対策、本実践の汎用化に着手 (2015年度)

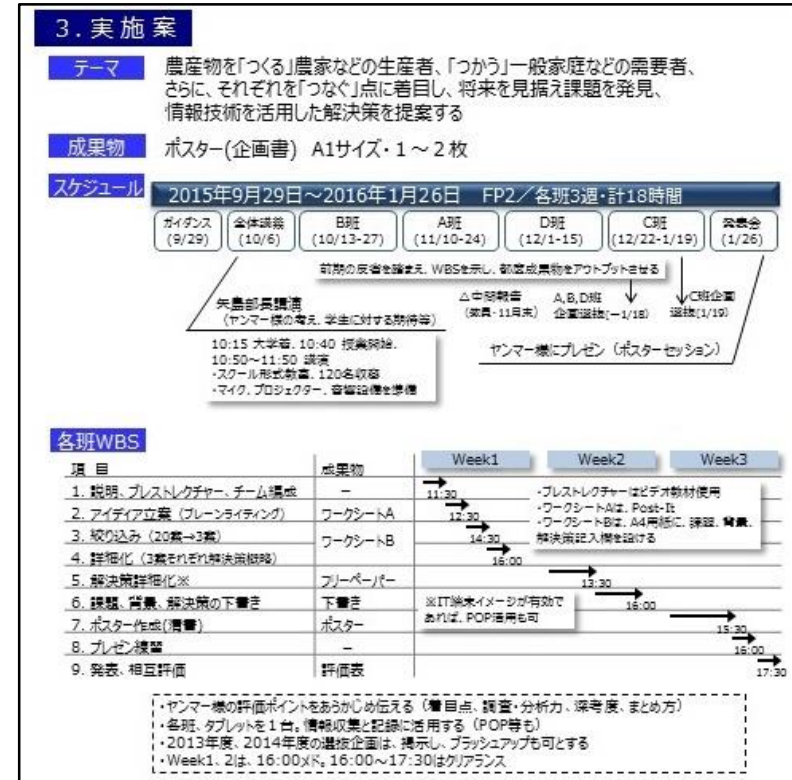


図4 企業への改善提案資料 (2015年9月25日 Y社向け検討資料より抜粋)

# 3.6 2012～2015年度実践まとめ

表2 2012～2015年度、本実践サマリー

年度	2012	2013	2014	2015
全体テーマ数（半期）	6	6	5	4
各グループ人数	約20名	約20名	約24名	約28名
テーマ学習期間	2週	2週	3週	3週
テーマ学習内容	見学	企画	企画	企画
全体講義	あり	あり	なし	あり（企業講演）
授業アンケート評点※ （上段前期、下段後期）	3.81 3.86	4.07 3.99	—	4.08／4.40／4.01 4.07／4.39／4.00

※「まじめに意欲的に取り組んだ」の評点。  
2014年度は実施できず  
2015年度は、「全体平均」「選抜者平均」  
「居残り組平均」の順

- **まとめ**
  - **情報システム企画につき、実際の企業課題を解決する授業を実践、改訂**
- **識者意見（isecon2015 インタラクシオン審査）**
  - 一定の実践効果を得るも、**教員視点評価が弱体**
  - 教員評価視点を含め**改善プロセスの進化**を期待

# 4.1 改訂内容／2016～2017年度

- **2016年度**（前期：情報システム企画の「練習」。後期：「実践」 → 2017年度も同様）
  - 識者の意見を得て、**教員視点の成果物評価**を実施し、**授業目的の達成に向け、随時修正**を行う
  - 前期、練習では、身近なテーマ（大学学食改善等）を題材に、企画立案、詳細化、企画書作成（A4サイズ2枚）、チーム毎企画発表を実施
  - **後期**、実践では、第1週 P 社、第2週 Y 社来校、企業より直接テーマのレクチャー
  - 第3週以降、テーマ学習で情報システム企画の実践、各グループ 3名／チーム。学生は企画課題として P 社または Y 社を選択し、各グループ3週をかけて企画立案、ポスター作製
  - **実社会ではまず相手に伝わるドキュメントが重要**であることから、テーマ学習で求める**成果物はあくまで企画書**（ポスター／ドキュメント）
  - ポスターを各社に送付、選抜。第15週、**全員それぞれ選択した企業に訪問**、選抜者はプレゼン実施
- **2017年度**
  - 前期は変更なし。後期、連携企業 P 社のみ。第1週、**全員で P 社訪問**、企画テーマレクチャーおよび**工場、新製品見学**を実施
  - 第3週以降、各グループ3週をかけて企画立案、ポスター作製。前期同様、成果物の教員評価を継続
  - アクティブラーニング型授業効果検証プロジェクト※の、**アクティブラーニング効果プレ**（テーマ学習第1週時）、**ポスト**（同第3週時）**調査**を実施
  - 企画選抜を経て、選抜者のみ企業訪問、プレゼン実施。つまり選抜者は2度企業訪問

※アクティブラーニング型授業効果検証プロジェクト（2015年～）

代表 溝上慎一氏、複数の研究者と実践者が協力して調査を実施

# 4.2 企業訪問改訂ポイント

## ・ 背景

- 2015年度、企業訪問において、選抜組と「居残り組」をつくることにより、選抜された学生の評価は非常に高くなったが、「居残り」学生の評価は低迷した
- これを改善するために、「居残り組」を廃し、企画が選抜される／されないに関わらず、**企業訪問の機会は全員に与える**こととした

## ・ 内容

- **2016年度**後期、企業レクチャーを第1週（P社）、第2週（Y社）に学内で実施。全グループテーマ学習終了後、第15週、P社、Y社、それぞれに分かれ、**全員がいずれかの企業に訪問**することとした
- ただし、企業へのプレゼンは選抜者のみとし、同行した学生はこれを「見学」。選抜者のみがプレゼンを実施、企業の方々とのQ & Aの様子を見て、その心象なり気づきを得れるように対応を図った
- **2017年度**後期、連携企業はP社のみとなったため、企業レクチャーを第1週P社に**全員で訪問**し、受講した
- ここでは、レクチャーだけに留まらず、**企画前の情報収集と非日常性を与えるため工場見学**を実施。また**未発表製品のデモを見学**することができた
- この際、学生はP社社員からのプレゼンを受けることになり、**企業が実践する生の「プレゼン」を体験**することとなった

# 4.3 2016～2017年度 本実践サマリー

授業「フィールドプラクティス1（前期）、2（後期）」、情報関連学科 大学1年生（120名）必修

グループ/週	前期（4～7月） 「企画」練習						後期（9～1月） 「企画」実践						
	1, 2	3～5	6～8	9～11	12～14	15	1, 2	3～5	6～8	9～11	12～14	15	
グループA	全体講義	本実践	別テーマ	別テーマ	別テーマ	全体講義	全体講義	本実践	別テーマ	別テーマ	別テーマ	全体講義	
グループB		別テーマ	別テーマ	別テーマ	本実践			別テーマ	別テーマ	別テーマ	別テーマ		本実践
グループC		別テーマ	別テーマ	本実践	別テーマ			別テーマ	別テーマ	別テーマ	本実践		別テーマ
グループD		別テーマ	本実践	別テーマ	別テーマ			別テーマ	別テーマ	本実践	別テーマ		別テーマ

授業1週は  
4コマ  
(6時間)

1週完結で、企画立案、  
企画書作成、チーム発表  
を3回（毎週）実施

企業テーマ企画立案、ポスター作製

全員で企業訪問、選抜プレゼン（2016年度）  
選抜者企業訪問、プレゼン（2017年度）

授業オリエンテーション  
企画レクチャー

企業を招きレクチャー（2016年度）  
全員で企業訪問、見学・レクチャー（2017年度）



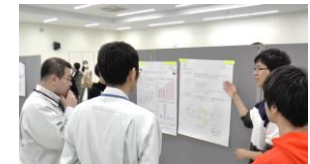
ブレインストーミングレクチャー



チームでブレインストーミング



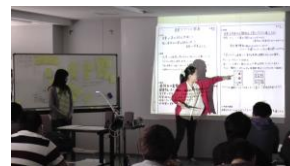
企画テーマレクチャー



選抜者プレゼン



企画書作成



企画発表



ショールーム見学



プレゼンQ&A

図5 2016～2017年度、本実践概要

# 5.1 教員による成果物評価

## 概要

- 2016年度から、**学生評価と教員評価**につき同じ視点で学生の成果物の評価を行い、**相関を分析**した
- 結果は、**翌週以降の授業運営にフィードバック**し、**適宜改訂**（配布資料の追加など）を実施した
- なお、**企業評価視点も重要なポイント**であるため、これは従来通り実施し、**企業でのプレゼンを行うための企画選抜は企業に託した**

## 内容

- 企画成果物に対する学生の評価項目、教員の評価項目を定義し、前期は毎週、後期はテーマ学習第3週に行った

表3 成果物評価項目

教員評価 (5点法加算)	学生評価における設問 (3点法差分)
内容	企画内容を良いと思ったか
独創性	アイデアは独創的か
論理性	解決策は課題と対応していたか
調査	裏付け調査は十分になされていたか
具体性	アイデアは具体的に表現されていたか



# 5.2 教員評価と改善事例

## 評価結果 (図6)

- 各評価項目において、強弱はあるものの正の相関が存在
- 内容と具体性の相関が弱い

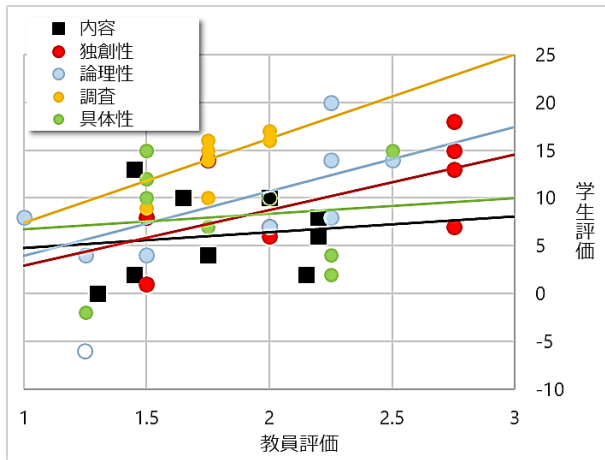


図6 教員・学生間評価  
(2017.10.24 グループA)

## 改善内容 (図7)

- 企画初期段階（ブレインストーミングによるアイデア創出）に問題があると考え、ブレインストーミングに関する追加資料を作成
- 次グループ（グループD）の実践時に配布、説明を行った

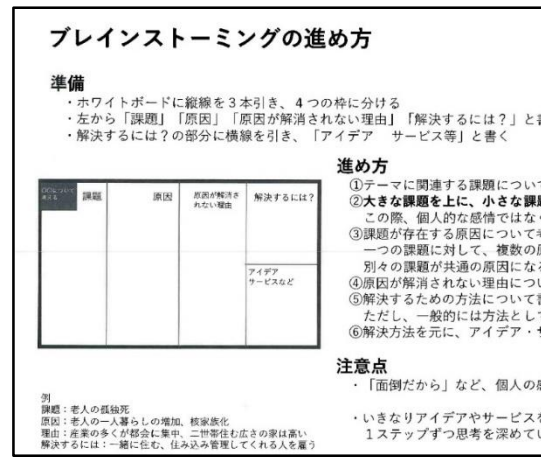


図7 追加配布資料  
(ブレインストーミングの進め方・一部分)

## 改善後評価結果 (図8)

- グループAと比べ、評価項目全般の相関強度が高まった

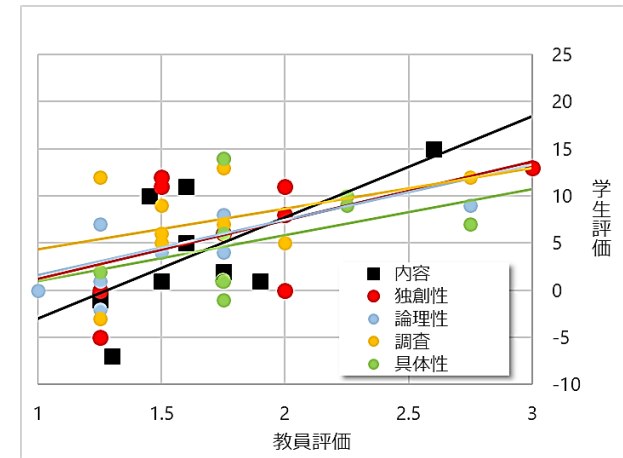


図8 教員・学生間評価  
(2017.11.14 グループD)





# 5.4 検証結果

表4 アクティブラーニング効果検証結果

評価項目	MAX	種別	全国平均			全グループ			グループ A			グループ D			グループ C			グループ B		
			プレ	ポスト	変化	プレ	ポスト	変化	プレ	ポスト	変化	プレ	ポスト	変化	プレ	ポスト	変化	プレ	ポスト	変化
①深い学習アプローチ	5	平均	3.44	3.53	0.09	3.44	3.57	0.12	3.56	3.65	0.09	3.21	3.46	0.25	3.46	3.60	0.13	3.53	3.67	0.14
		標準偏差	0.58	0.61		0.63	0.64		0.65	0.59		0.71	0.79		0.56	0.63		0.55	0.52	
②浅い学習アプローチ	5	平均	2.94	2.91	-0.03	3.13	2.98	-0.16	2.98	2.79	-0.19	3.18	3.27	0.09	3.24	2.98	-0.26	3.17	2.80	-0.38
		標準偏差	0.65	0.69		0.71	0.79		0.71	0.70		0.86	0.80		0.67	1.08		0.57	0.49	
③積極的関与	4	平均	2.56	2.58	0.02	2.26	2.39	0.13	2.36	2.53	0.18	2.19	2.22	0.03	2.28	2.38	0.10	2.22	2.28	0.06
		標準偏差	0.67	0.70		0.69	0.68		0.79	0.63		0.75	0.70		0.58	0.77		0.63	0.42	
④継続意思	4	平均	2.50	2.54	0.04	2.35	2.44	0.08	2.40	2.53	0.14	2.21	2.27	0.06	2.46	2.48	0.02	2.35	2.63	0.27
		標準偏差	0.78	0.79		0.71	0.77		0.78	0.75		0.76	0.90		0.58	0.75		0.70	0.80	
⑤予習の仕方	4	平均	2.28	2.43	0.15	2.84	2.90	0.06	3.05	2.81	-0.23	2.68	2.90	0.22	2.74	2.91	0.17	2.86	3.00	0.14
		標準偏差	0.58	0.61		0.51	0.52		0.48	0.47		0.63	0.61		0.41	0.53		0.43	0.45	
⑥他者観・仲間	4	平均	3.14	3.20	0.06	3.02	3.19	0.16	3.15	3.41	0.26	2.89	3.15	0.26	3.03	3.07	0.04	3.01	2.94	-0.07
		標準偏差	0.72	0.71		0.76	0.64		0.73	0.50		0.80	0.65		0.88	0.80		0.68	0.58	
⑦他者観・情報共有	4	平均	3.07	3.20	0.13	3.15	3.30	0.16	3.19	3.44	0.25	3.13	3.25	0.13	3.10	3.20	0.11	3.17	3.21	0.04
		標準偏差	0.75	0.72		0.75	0.60		0.71	0.54		0.86	0.66		0.83	0.76		0.65	0.40	
⑧AL尺度（外化）	4	平均	2.55	2.75	0.20	2.74	3.09	0.35	2.85	3.27	0.42	2.62	3.17	0.55	2.70	2.76	0.06	2.80	3.18	0.38
		標準偏差	0.79	0.78		0.65	0.65		0.66	0.63		0.76	0.75		0.61	0.70		0.56	0.45	
⑨主体的学習態度	5	平均	3.41	3.33	-0.08	3.19	3.40	0.22	3.30	3.46	0.17	3.02	3.29	0.28	3.24	3.53	0.29	3.19	3.56	0.37
		標準偏差	0.63	0.62		0.65	0.73		0.55	0.66		0.67	0.71		0.73	0.85		0.66	0.42	

※青色アミ掛けは、全国平均評点以上の事項（平均点）  
 なお、②浅い学習アプローチは評点が低いほど良い

## ● 評価結果

- 授業後（ポスト調査）9項目中**6項目が全国平均より上回っている**（全グループ平均）
- 授業前後（プレ/ポスト調査）は、**全項目で改善**が見られ、うち8項目は全国平均を上回っている

# 6.1 検証結果考察

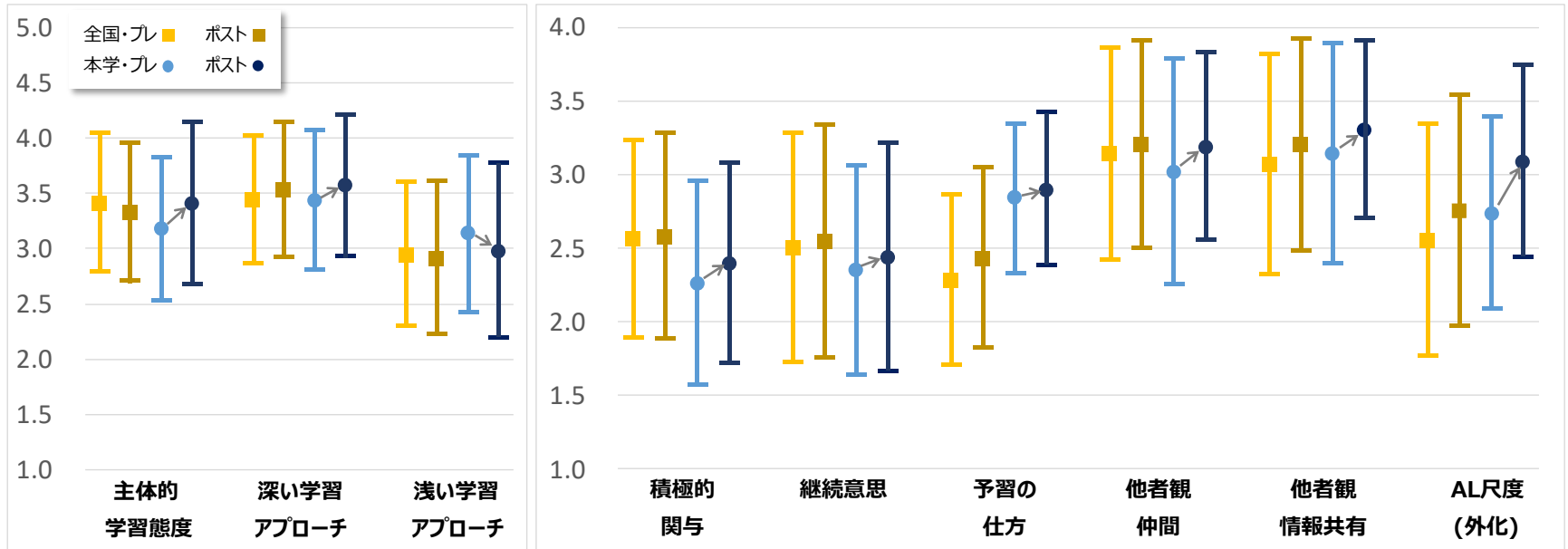


図10 AL指標評価結果 (左：MAX 5点項目, 右：MAX 4点項目)

## 考察

- 主体的学習態度向上は、中間成果物（下書き等）にてマイルストーンを示し、時間のコントロールは**学生に託した**ことが寄与
- 浅い学習アプローチの偏差拡大は、学生の**学力差拡大**が要因
- 他社観の偏差縮小は、チーム編成を自由にかつ徹底したことが寄与
- AL尺度（外化）向上は、徹底的に**成果物をドキュメント**としたことが寄与

# 6.2 総括

- **総括**

- 本実践は、企業と連携し大学の授業にて企業の課題解決を目的とした情報システム企画を行った。2012年より6年間実践、改訂を継続し、企業で直接企業から学生への課題提起、企画立案、企画書面作製、企業による選抜を受け、企業でのプレゼンを実践する教育パッケージとして形成した
- 授業運営のためのWBS、各種資料を整備し、アクティブラーニング型授業として実践を進める上で、情報システム企画スキルである論理性、具体性、独創性、調査力、深掘り力の醸成を図り、企画書面という成果物を得ることによって、情報システムの可能性と価値を理解、学生の主体性と自立性を身につけさせることを目的とした
- 学生にとっては企業による選抜を受けること自体が貴重な体験であり、また教員と学生の成果物評価を収集し、適宜改善を図ってきた。さらに先行研究であるアクティブラーニング評価との比較を行い、本実践の有効性を検証した

## 6.3 今後の取り組み

表5 2012～2017年度、本実践サマリー

年度	2012	2013	2014	2015	2016	2017
テーマ数（半期）	6	6	5	4	4	4
各グループ人数	約20名	約20名	約24名	約28名	約28名	約28名
テーマ学習期間	2週	2週	3週	3週	3週	3週
テーマ学習内容	見学	企画	企画	企画	企画 (練習・実践)	企画 (練習・実践)
全体講義	あり	あり	なし	あり(学内 企業講演)	あり(学内 企業講演)	あり(学外 企業講演)
授業アンケート評点 ※前期	3.81	4.07	－	4.08 (4.40、4.01)	4.45	4.08
授業アンケート評点 ※後期	3.86	3.99	－	4.07 (4.39、4.00)	4.32	4.10 (4.56、3.95)

### ● 今後の取り組み

- － **テーマ学習時間の拡大**。前期3テーマ（4週／テーマ）、後期4テーマ（3週／テーマ）
- － P社連携は終了。来年度の授業実践においては本学方針である「地域連携」を意識し、**地元企業**との連携（Z社、F社）を模索する
- － 企画対象とする課題は情報システム関連であることを意識しているが、教育対象は大学1年生に限定するものではないため、**他校でも教育実践**が可能なように、資料、ツール等の整理を進める